

『engage2 離れざる想い』

著：ふゆの仁子

ill：水名瀬雅良

永見忠正の葬儀は死去した二日後、完全な報道規制のもと、通夜、その翌日に親類縁者のみで告別式が行われた。

式的一切を取り仕切ったのは、父と次兄だった。

目の前で順番通りに淀みなく進むことのすべてが、実感を伴って感じられない。お棺に入った忠正の顔を見ても、霊柩車で運ばれ火葬されたお骨を見ても、実感が湧いてこない。

二日間を通してずっと焚かれていた線香の噓(む)せ返るような匂いの気持ち悪さに、永見はすべてが終わってからトイレに駆け込んだ。

永見は実家に戻ってから、水以外のものを何ひとつ口にしていなかった。だから胃の中には吐くものも何もなかったが、嘔吐感だけはあとからあとから湧き上がってくる。胃の振れるような感覚を味わいながら、ずっと胃液を吐き続けた。

葬儀のあとは気絶したように眠り続け、翌朝、起き上がることができなくなっていた。

昼過ぎまで起きてこないことを心配した家政婦が、具合の悪そうな永見を見つけ、医者を呼ぼうとした。でも永見は、それを拒んだ。

「でも、熱が……」

世話をしてくれる家政婦以外のすべての人をシャットアウトしたまま過ごし、朦朧とした意識の中で伊関のことを考えていた。

彼は今何をしているだろうか。あの日別れて、永見が消えたことを知ったのはいつか。

怒っただろうか。悲しんでいるだろうか。それとも、何も思っていないだろうか？

映画の撮影は順調に進んでいるのか。

東堂潮は、伊関に粉をかけてきていないだろうか。

そして来生はどうしているか？

その名を思い出した途端、恐れを感じる以前に、しなければならぬことを思い出した。

なんのために自分が戻ってきたのか。何をしなければならぬのか。

祖父という絶対の後ろ盾がなくなった今、すべてに自分で対処しなくてはならない。

これまでも仕事に関してすべて自分一人の力でやってきたが、家族に対して真正面から対峙することは避けてきた。

「今日は、何日だ？」

永見はベッドの上で起き上がるとカレンダーを確認する。

伊関のもとを離れたのが一月八日。あれからちょうど一週間経っている。寝込んでいたのは二日ほどだ。

こうしている間にも、もしかしたら来生は伊関に対して手を出しているかもしれない。腕時計を確認して部屋を出る。そして、会社に行っている正恭に電話した。

二人の兄はいずれも、今は結婚して同じ敷地内にそれぞれの家を構えている。

子どももいたはずだが、詳しいことは知らない。結婚式にも出席していないため、兄嫁の顔もわからないぐらいだった。

「兄さんにお聞きしたいことがあります。近いうちにお話しするお時間をいただきたいのですが」

正恭に言うと、電話の向こうで兄は小さく笑った。

『ようやく正気に返ったか』

明らさまな嫌みな返事に、永見は声色も変えず「はい」と答える。事実だから否定はできない。

『明日の夜、敬吾兄と一緒に母屋へ行く。応接室に八時。母さんにはこちらから連絡を入れておく。いいな？』

兄は一方向的に決めると、永見の返事も確認せずにそのまま電話を切った。もしかしたら今夜になるかもしれないと恐れていた。だから、一日できた猶予に永見はほっとする。

仕事で競争相手と駆け引きするよりもよほど緊張している。

同じ血を分けた兄弟とはいえ、一緒に何かをした記憶はない。その記憶も、兄と弟という、通常考え得る優しかったり温かかったり、どこかほのぼのしている関係の上に成り立っているものではない。永見は幼いながらに兄の自分に対する視線のおかしさに気づいていて、無意識にその視線から逃れるようにしていた。

仕事であれば互いの持ち札がほぼ同じ状況だが、今回はかなり違う。

ゲームを始める前の段階で、永見の手元にはほとんどカードがなくて、手の打ちようがない。

おまけに、兄の手元にどれだけの持ち札があるのか、まるで見当がつかない。とりあえず来生という名前のジョーカーがあるのは知っている。

来生についての記憶は、死への衝動と生への執着が微妙に絡み合っている。記憶の奥底に封じ込めながら、時折怖いもの見たさでその封印を解く。

自分を戒める。愚かな過ちを二度と繰り返さないために。

だが、今また、記憶の中だけでなく、来生が実在して自分の目の前を歩き回っている。いや、自分だけではない。永見の命よりも大切な伊関にまで、その触手を伸ばそうとしている。

二度と日の射す場所に出てこられないはずだった来生を解放し、裏から手を回して伊関の邪魔をしているのは、他でもない兄だ。自分の手を汚さない、完璧なやり口。またそれが嫌というほどの的を得ている。

自分がこれまでしてきた仕事でのやり口とあまりに似た手段に、閉口しつつも感心していた。

正恭が永見の知っている兄である以上、手加減はあり得ない。確実に獲物の喉元を狙って息の根を止めにやってくる。

永見はいつまでも、震える手で受話器を握り締めていた。

翌日、夜八時。永見が応接室へ下りてきたときにはすでに、正恭と敬吾は二人でウイスキーの入ったグラスを手に何かを話し込んでいた。

時間どおりにやってきた弟に気づくと、正恭はグラスをテーブルの上に置き、自分の前のソファに座るように促して、応接室の鍵を閉めた。

「こうして兄弟三人顔を合わせるのも久しぶりだ。座りなさい。アルコールはどうす

る？」

正恭は口元に深い皺を刻んで笑う。

「結構です」

永見はその顔から目を逸らし、ソファに腰を下ろした。不必要なほど柔らかいスプリングが、なんとなく落ち着かない。

「潔とこうして向かい合うのは何年ぶりくらいだろうか。兄さん、覚えていますか？」

「私は初めてだ」

大仰に言う正恭に、敬吾は顎に手をやって真顔で答える。

「二、三年前に一度、お祖父さん主催の花見の会か何かで飲んだことはありませんでしたか？」

正恭は酔っているようで、かなり口が軽くなっている。語尾が伸びる話し方に眉を顰め、永見はひとつため息をつく。

「思い出話をするつもりはありません。本題に入ってよろしいでしょうか」

一句一句区切るように、永見は胸の中に溜めていた言葉を口にする。

グラスを片手にソファに深く座り背中を預けていた正恭は永見の言葉に頷き、座り直してグラスをテーブルの上に置いた。

「なんだ」

深い茶色の革張りのソファと、同系色の家具が置かれた応接室に、深くて一瞬の沈黙が訪れる。柱時計の音が壁に反響して、微妙な響きを作り出す。

「来生……来生澄雄という男を、ご存じですよ？」

本来口にしたくもないその名前を口にして、永見は乾いた唇を閉じる。

「来生？」

正恭は口先で復唱し、敬吾は我関せずという顔をした。二人の反応で、命令系統が完全に明らかになる。

「これは単なる確認です。来生は祖父の命によって、施設に入り、一生、日常生活に戻れないようになっていたはずですよ」

数年前の永見の件で取られた措置だ。来生は永見に関するだけに、狂気と化し、我を忘れた。

「それなのに、彼は今東京にいて、さらに何食わぬ顔で仕事をしている。よほどのことがないかぎり、通常に仕事をするのは不可能なはずですよ。だが実際にクリエイティブ・ディレクターという肩書きで、ヤスダ・コーポレーションに取り入り、かつ俳優である東堂潮の後ろについた。そして兄さんの名前を使って私の力を封じた上で、伊関拓朗を傷つけるように命令されたと聞きました」

「ほう」

正恭は永見の言葉に、擲(や)楡(ゆ)を込めた声を漏らす。

「真面目に聞いてください」

永見はきつい口調で兄を制す。必要最低限以外は、口をききたくない。近くの場合にいて同じ空気を吸っていると思うだけで、吐き気がして激しい嫌悪感が湧き上がってくる。

「私は永見の家を出た者です。それは兄さんも理解しているはずですよ。お祖父さんが入院したときにも、私に見舞いに来る必要はないとおっしゃったぐらいですから」

あのとときの電話口の言葉は、一生忘れられない。

正恭は色々な意味から、あの電話で永見にかまをかけたのだ。病院で会ったときの正恭の言葉が、それを証明している。

『やはり、自分から戻ってきたか』

無理矢理引き戻すのではなく、自分から戻ってくるように、仕向けたのである。「それなのに、なぜ今になって私の仕事に横やりを入れようとするのですか。なぜ今になって家に戻らせようとしたのですか。私は何か兄さんに迷惑をかけましたか？何かしなければならぬことが、この家にありますか？」

腹の底で煮えくり返る怒りを堪え、意識的に淡々と続ける。正恭は敬吾と顔を合わせ、それから小さく吹き出した。

「迷惑、迷惑……ねえ」

次兄は実に楽しそうに笑う。掠れた声が永見の耳に残る。

「私は家に戻る。あとは頼むぞ」

長兄はグラスに残っていた酒を飲み干すと、次兄に目で合図して席を立つ。

扉に向かう長兄の後ろ姿は、父によく似ている。

和室でいえば二〇畳ほどある広い応接間に永見と正恭だけが残される。ただでさえ気まずかった空気が、さらにピンと張り詰める。

「正月に伝言をしたんだが、聞いていないのか？」

正恭は煙草に火を点け、ゆっくりと煙を吸ってから大きく吐き出す。

「何をですか？」

今年の正月は、三が日が明けてから祖父に新年の挨拶をするためだけに田園調布に戻り、その日のうちにマンションに帰った。言われてみればそのときに祖父が兄のことで何か言っていたように思うが、話の趣旨はまるで覚えていない。

永見の表情に、正恭はすべてを理解して、ひとつため息を吐いた。

「次の選挙に、敬吾兄さんが立つ。お祖父さんのかつての支持者層を引き戻してね」

永見はぼんやりと先を思い出す。

「潔の手が必要だ。だから、戻ってこい」

『私は無理だと言ったが、どうしても正恭が潔に伝えろとうるさく言うから、とりあえず伝えておく』

祖父はそう言って困ったような顔をしていた。

家を出てから十五年以上も経っているのに何を言うのかと、永見は考えもせずに「お断りします」と告げ、そのまま一笑に付したのだ。当然、この話はそれで終わるものだと思っていた。

永見は兄の言葉を聞いても、揶揄(からか)われているとしか思えなかった。永見は政治に関しては素人である。祖父の政治家経験の話もまるで知らないし、長兄が立候補するからといって、それに自分が協力する必要性も感じられない。だから一度断れば、それで話は完全に終わったと思っていた。

「祖父さんが引退してから、政治の世界は思っていたよりも時間が経っている。かつての支持者でまだ残っている層もあるが、祖父さんのあとに立候補した奴がなかなかやり手でね。こちらの戦略はすべてお見通しで、今度の選挙で投票数をどこまで取り戻せるか、それによって当選できるか否かがかかっている」

正恭の永見を見る目は、真剣そのものになっている。

正恭は近年、議員秘書の資格を取得したらしい。

祖父の秘書であった荒(あら)川(かわ)という男は非常に生真面目な人間で、祖父の二人目の秘書であり、その後引退するまでずっと傍にいた。

祖父よりはもちろん若い、それでもかなり高齢で、現役当時はとても有能な人だった。祖父が政界を引退してなお絶大な影響力を及ぼしているのも、荒川の力のおかげとも言われている。

父が二世議員として出馬する話が出たとき、若かった正恭は荒川に協力を要請した。だがその際にはにべもなく断られている。本当の理由は父にまるでやる気がなかったことにあるが、荒川が本気を出して動けば、父がなんとおとうと当選させることは可能だったろうと言われている。

その後祖父の引退とともに荒川も隠居していたが、二、三年前当選した男の後ろにつき、圧倒的な後ろ盾となっているらしい。

「……それが私が家に戻ることに、一体どんな関係があるのですか？ 私は政治のことなどまるでわかりません。そんな素人の私に何かお手伝いできることがあるとは、とうてい思えません」

遠回しな言い方では、言わんとしていることがわからない。

「それがね、あるんだ。潔にしかできないことが」

正恭はにやりと笑い、机の上に背広の胸ポケットから出した一枚の名刺を置く。それには祖父同様、政界にかなりの影響力を及ぼす、ある有名な財界の長老の名前が書かれていた。

忠正が政界の裏の首(ド)領(ン)と呼ばれていたように、財界の裏のトップにある男だ。

近年、検察庁に脱税容疑で何回か検挙されかかっているが、すべて途中で闇に葬られている。

「どういうことですか？」

永見は顔を上げ、訝しげな視線を兄に向ける。兄は短くなった煙草を灰皿で揉み消し足を組み直す。

「この方の力があれば、荒川に勝つのはもちろん、敬吾兄さんに怖いものはなくなる」

それは確かだろう。だが、この老人と永見の家にはなんの繋がりもないはずで、協力を求めることは容易ではないだろう。

難しい顔をすると、正恭は肩を竦めた。

「潔が怪訝に思うのは確かだ。だがちょっとした縁があつて、ある条件さえ呑めば、この方が敬吾兄の後ろ盾についてくれることにまで話が発展したんだよ」

「ある条件とは？」

わけがわからず首を傾げると、正恭はふっと笑う。

「近いうちに、この方の接待をしてもらいたい。これが潔にしかできないことだ」

「接待……？」

何のと尋ねようとした瞬間、兄の微妙な表情で、言わんとしていることを理解する。同時に全身の血の気が引いていく。

つまりその政治家の伽(とぎ)の相手をしろと、正恭は言っている。名刺の男が男色の趣味を持っていることは、政界では公然の秘密だ。

「何を……。一体何を言っているんですか？」

声が上擦り、膝に置いた手が震える。

「今潔がバックアップしている俳優、確か伊関拓朗と言ったな？」

その名に、永見の身体は大きく震える。覚悟していたとはいえ、不意をつかれ表情を繕う余裕がなかった。

「私はよく知らないが、来生くんがね、実に彼に興味を持っているんだ。できることなら包丁で細かく彼の肉を刻みたいところだと、嬉しそうに言っていた。さすがにそれはやめなさいと言っているんだが、宥めるのがひと苦勞で……どうせやるなら身体に傷はつけず、精神的に痛めつけるだけにしなさいと説得している」

正恭は恐ろしいことを口にしながら、実際に来生を自分の配下に置いていることを認める発言をする。そしてその来生が伊関を狙っている。

「どうして来生が外に出ているのですか。教えてくださいっ！」

永見は視線を床に落とし、声を必死に絞り出す。

「伊関くんは、潔と来生くんの過去を知っているのかな？」

だが兄は永見の質問には答えず、話を違うところへ持っていく。

質問の内容を理解して、再び身体が震える。

「ずいぶん前になるが」

正恭は顎をしゃくり、永見の表情を試すように、小さな笑いを浮かべた。

「アメリカ、確かハーレム……だったな。あそこでも派手に、何かをしていたようだな」

もう、驚くという段階を通り越していた。

「……な……ぜ……」

永見は声にならない声で呟き、正恭の顔を見据えた。

アメリカでの屈辱の事件は、あの場にいた溝口しか知らないはずだ。祖父にだって言っていないその事実を、なぜ、よりによって正恭が知っているのか。溝口が口を割るわけがない。となれば、正恭はなんらかの手でもって、永見のひた隠しにしていた過去を洗ったのだ。

膝を掴む手の力が強まる。唇も噛み締め、腹の底から湧く怒りを必死に堪え、次の言葉を待つ。

「……あの方から今回の話を聞いたときには、まったくどうしようかと思ったよ。永見家の者が、ずいぶん恥知らずな行動を取っていたものだ。潔がこれまで仕事上でしてきたことを、あの方は何もかも知っておられる。その上でお前と食事の席を設けたいと、半年ほど前からおっしやっしていらしてね。ずいぶんお待たせしてしまった」

おそらく正恭は、事実として知り得る永見の過去すべてを知っているのだろう。

永見は愕然とする。

もちろん自業自得だ。

事実なのだから、一切言い訳はできない。ただ恐れているのは、これらの事実を正恭が永見を追い詰める材料に使うのではなく、伊関を貶めることに使おうとしていることだ。

ずっと伊関に言えずにいる。折を見て、すべてを包み隠さずに言わねばならないと思っていた。他人の口からでなく、自分の口から伝える。そうしなければならない。

これからもずっと、一緒に生きていきたい。だから、苦しくてもしよしの別れを選んだのだ。それが今こんなことになる、想像していなかった。

永見はぐっと拳を握る。

「私がお前を接待すれば、今後の伊関拓朗への介入を……やめていただけるのですか」

永見はなるべく声が震えないようにした。

「ああ、もちろん」

正恭は間髪入れず、答える。

「映画の配役の件は置いておいても、来生くんの身柄は拘束できるだろう」

「断ったら……」

「言わずもがな、というところだ。彼が暴走したら、どうなるか潔には容易に想像つくだろう？ 来生くんの動きを止めることができないし、潔のことが伊関拓朗の耳に入るのもそれほど遠い先のことではないだろう。それから」

兄は笑う。

「もう、結構です」

先を続けようとする兄の言葉を、永見は強い口調で制する。

正恭はそんな弟である永見の顔色を眺め、足を組み直した。

改めて見ても、本当に弟である永見は母によく似た面立ちをしている。

生まれたとき、正恭は弟のあまりの可愛らしさに驚いた。年の離れた弟の存在が嬉しくて仕方なかったのだが、永見家の者の特徴として、正恭も感情の表現が得意ではなかった。

小さなうちは気軽に遊べたのだが、やがて成長して物事を理解する年になると、どう接したらいいのかわからなくなってしまった。

無邪気な笑顔に見つめられて動けなくなり、素っ気ない態度を返すしかできなくなる。そうこうしているうちに、無邪気な笑顔は失せ、挙げ句、距離が広がり、大学入学を前に父に勘当されてしまった。

生まれたときから母親似の整った顔をしていたが、成長するに従い、それは輪をかけていった。綺麗という、あまり男に対して使わない形容詞が、当てはまった。

そんな弟は東京の理系の国立大学に入学後、広告代理店のトップである電報堂に入社した。

その後のめざましいほどの活躍は、さすがに正恭の耳にも入ってきている。

両親も長兄も口には出さないが、家族全員が永見の動向を追っていた。そのうち祖父の呼びかけには応えて、正月には戻ってくるようになり、父も勘当の事実には触れなくなった。

ここ数年の間に、弟は随分雰囲気が変わったように思う。相変わらず冷めた表情に変わりはないが、どこことなく柔らかい空気を、ふとした瞬間に醸し出すようになった。

年に一度の正月の集まりで、祖父と接する際の笑顔を見て、ひどく驚いたのを覚えている。

その理由が、伊関拓朗という男にあると知ったとき、正恭の胸に得も言われぬ感情が湧き上がった。同時に自分が弟に対して抱いていた気持ちを、嫌というほどに思い知らされた。兄という立場でなく、むしろ父の立場に近い。でも弟に対して普通に抱くそれとは違う、複雑すぎる想いがあった。

冷静に判断しながらも、正恭はその思いを必死に打ち消そうとした。

気づいたところで、今さら素直に接することなどできない。弟には弟の生活があり、自分の進む道とは明らかに違っている。わかっていながら、どこかで弟を家に縛りつけ手元に置きたいと思ってしまう衝動に駆られた。

そんな矢先、今年の正月に兄の出馬が本格的な話として持ち上がった。さらに夏を

過ぎた頃から、目に見えて祖父の容体が悪くなったのだ。

次いでこれまで祖父の力によって封じられていた、弟の過去が明らかになった。

正恭はそれらの事実を知って同情しないではない。よく生きてこられたものだと思っただが、それとこれとは話が別だった。なぜあれだけ物事を冷めた目で眺めているのか、その理由もわかった気がした。

今の永見は直接自分に対する攻撃については、巧みに躲(かわ)す術を心得ている。もし火の粉が降りかかったとしても、万が一間違っただけで自分の身が痛めつけられることになったとしても、眉を顰める程度で取り乱すことはないだろう。二度、死んでもおかしくない場面に出合っている彼だから、正面切って何かをしかけられても、びくともしないだろうことはわかっている。

だから本意ではなかったが、伊関を攻めることにした。あの男に手出しをすることで永見に影響が出ると考えるのは無性に苛立ったが、それでも他に方法はない。そのため、来生を引きずり出すことを思いついた。

さすがに来生を見つけるのは時間がかかった。東京から離れた病院でひっそりと生かされていた彼を見つけたとき、正恭はそこに自分の姿を見たような気がした。永見潔に魅せられ、入れ込み、そして最後に己の身を持ち崩した人間の典型だったのだ。

同時に、少なくとも自分が、永見と血の繋がりのある人間であったことに感謝もした。

兄であるというプライドとモラルが、最後の一线を超えて永見を求める衝動を押しとどめていた。だが一歩間違えれば、来生と同じ轍(わだち)を踏んでいたかもしれない恐怖が潜んでいる。

弟でありながら、いや、弟であるがゆえに、永見の醸し出す雰囲気は正恭を惑わす。

敬吾は早々にリタイアしている。下手に関わると危険だという匂いを一足先に感じた長兄は、極力弟に近寄らないようにしていた。

孤高を保ち、触れれば弾けそうな繊細な神経で必死に生きている。そんな永見が、たった一人の人間、それも男のものになるという事実は、正恭にとってとうてい理解できるものではなかった。

入り組んだ様々な感情が、正恭の心の中で交錯する。どこまでが許されることで、どこからが許されないことか、そのときに判断する冷静さと余裕はどこにも残されていなかった。

病院長に金を積み、祖父の意に逆らって来生を退院させた。

医師の話では、来生は日常生活なら常人と変わらずに営むことができるらしい。ただ一点、永見潔という男に関するだけで尋常でないのだと聞かされた。そこをうまく突きながら躲していけば、来生ほど今回の正恭の目的のために使える人間はいない。

財界の名士の話は、そのあとに降って湧いたことだ。

永見を引き戻すには、手元に置いておくという理由だけでなく、敬吾兄の選挙戦において彼の手腕が必要となることもあった。だが有能なブレインを擁しても、先の見通しはあまり良くなるらない。なんとか強力な後ろ盾がないものかとやみくもに奔走しているうちに、偶然知り得た情報だったのだ。

『ある方が、君の弟の味をみてみたいと言っている。望みを叶えてくれれば、見返りは思いのままだ』

この話を人づてに聞いて、正恭は非常に悩んだ。



仮にも、血の繋がった弟だ。

憎むどころか、かえってその逆の感情を抱いている弟を、兄のためとはいえ人身御供として差し出す。そんなことが人として、そして実の兄として許されることか。おまけに一度でもそんなことをして、二度目がないと保証できるのか。逆に足元を見られるのではないか。正恭はさんざん自分の道徳心を疑い悩んだが、最終的には伊関のことを天秤にかけて、妥協することにした。

得体の知れない相手に渡すぐらいなら、そちらのほうがよほどました。一度であれ今の状態で他の男と関係を持てば、さすがの永見も伊関のもとへ戻ろうとは二度と思わないだろう。そうすれば、必然的に永見は田園調布に戻ってきて敬吾兄のために働かざるを得なくなる。もちろん、そのあとのことは手抜かりのないようにする。

秘密が漏れないよう、相手が裏切らないよう、二重三重の手を打った。

そうして悩みぬいて決断したはずなのに、この期に及んで良心が痛み自分がしようとしている罪に、苛まれる。だから、余計なこととはなるべく考えないよう周りを見ず、自分の目的だけを見つめる。最終的には弟のためにもなるのだと、思うようにした。

「即答せねばなりませんか？」

かなり長い沈黙のあとで、永見は静かな声で兄に尋ねた。正恭は額に手をやったまま、首を横に降る。

「いや、すぐとは言わない」

どことなく落ち着かない態度で、正面から永見の顔を見るのを避けるように、正恭は新しい煙草に火を点けた。

「ただ、日を延ばせば延ばすほど、私たちの立場が悪くなることはあっても良くなることはないのは、理解しておくように」

「明日には返事をします」

永見はそう言うと、座ったまま会釈をしてから立ち上がり、応接室をあとにする。

弟の全身が震えていることに、正恭はもちろん気がついていて。

永見は自室に戻ると後ろ手に扉を閉め、背中をもたれかけさせたまま、ずるずる床に崩れ落ちる。

「く……っ」

両手で口を押さえ、喉と腹の底から溢れ出る嗚咽を必死に堪える。

家に戻り兄の前に立つにあたり、かなりの覚悟をしてきたつもりでいた。だが兄の考えは、その覚悟を遥かに超えていた。

過去のことを知っているのはよしとする。どうやって知り得たか、その手段を言及するかしないかは除いて、事実である以上はなんの弁解の余地もない。

だからと言って、目の前に呈示された条件は、あまりにひどい。

伊関と出会ってからが幸せすぎたのだろうか。それとも、これまでの自分の罪を一気に償う時期がきているだけなのか。

改めて自分の無力さを思い知る。

兄の言葉を受け入れなかったら、来生の手から伊関を守ることはおそらくできなくなる。そして永見が今の時点で隠していることすべてが、他人の口から伊関の耳に入ってしまうだろう。

それにより伊関が離れるとは思っていない。二人の絆はそこまで弱くない。ただ対等

でありたいと願っているから、同情や憐れみの目で見られることが嫌なのだ。伊関には、真っ直ぐ前だけを見てほしい。

誰よりも大切だから、余計なことに気を遣わせたくない。

とりあえず答えは保留したが、受け入れる以外に道はない。

かつて伊関と出会う前、永見は仕事を自分に有利に進めるため、自らの身体を餌にしてきたことが何度かある。自分の身体など汚れきったものだ。だがいらないと思えるものでも用途があるのだと知って、それを利用しない手はなかった。

でも伊関に抱かれ、永見は心が飢えていた事実気づかされた。不器用なセックスを受け入れながら、身体の細胞ひとつひとつが泣いていた。

抱き合う行為の本当の意味を、伊関が永見の体内に欲望を解き放ったときに、初めて理解した。さんざん色々な男に抱かれた身体。女を抱いた身体。触れられ、愛撫されても、何も感じないと思っていた。だが伊関の指がもたらすわずかな刺激に、堪えようと思えば思うほど声が溢れた。

あれは無我夢中のセックスだった。明らかに伊関は男を相手にするのは初めてだった。しかし永見は貫かれるだけで感じた。

あれから数えられないほど伊関と抱き合っているが、それでも毎回、何も考えられなくなる。セックスの快感を知ったばかりの思春期の頃のように、伊関のことだけでいっぱいになる。

伊関以外の人間と抱き合うことなど、もはや考えられない。

伊関と出会ってから、永見は他の誰の温もりも知らずにいる。それまでのことがまるで嘘のように、他の人間に触れられると考ただけで、辛くて哀しくて、どうにもならなくなる。それは伊関に対しても同じだ。

他の人間に触れてほしくない。自分と同じように考えているはずだと思っていた。しかし誤解からとはいえ伊関が松田美咲を抱いたと知ったとき、胸が張り裂けるような痛みを感じた。事実を知ってどれだけ胸が痛んでも、決して伊関から離れようとは思わなかった。伊関を想っているからこそ、辛かったのだ。

伊関が同じような気持ちで自分を愛しているのだと信じるなら、事実を知って怒りはしない。

ただ、哀しむだろう。

何も知らなかった自分を責め、何もできなかった自分を責めるに違いない。そんな伊関を見て自分はもう一度苦しむ。

これは自分に対する罰であり、これまでの生き方に対する戒めだ。

「拓朗……」

永見は無意識に自分の左手の中指に触れる。それでも落ち着かない気持ちに、伊関の声を思い出そうと、彼の指の感触を思い出そうと必死になる。

頬に零れる生暖かい涙に気づき、眼鏡を外してこめかみを指で押さえ、目を閉じる。

自分の過去の過ちが、こういった形で直接自分に跳ね返ってくる。当然の報いとして受け入れ、かつ乗り越えた上で前へ進まねばならない。

「拓朗」

名前を呼んでいると、少しずつ冷静さを取り戻す。

どれだけ恋しくても、伊関は自分の傍に来てくれない。その事実を自覚することで、強くなれる。

終わってしまった過去は今さら悔いても仕方がない。これからの永い人生を伊関と生きていくために、自分はここに戻ってきたのではなかったのか。

永見の味方で理解者であった祖父もいない。今自分と伊関の幸せを守れるのは、自分しかいない。

永見は頬を拭って立ち上がる。それから部屋に備えつけられている電話の受話器をとり上げた。結論を明日まで延ばす必要はない。だから、正恭に連絡する。

初めに電話に出たのは兄嫁で、次いで正恭に替わる。

『結論は出たのか？』

一体どんな表情でいるのか、まるで想像がつかない。でももうそんなことはどうでもいい。永見が考えねばならないのはもはや家族のことではなく、一生傍にいたいと願っている男のことだけなのだ。

永見は左手の中指を撫でて、一瞬揺らぎそうになる。

「接待の件、承諾します」

頭の中で組み立てた文章を棒読みした。

『では……』

「ただし！」

兄の声を聞きたくなくて、永見は強い声でその言葉を遮る。

「一度だけです。次は決してありません。そして約束してください。何があろうと伊関拓朗には決してこれ以上の手を出さないこと。来生の動きを完全に押さえること。そして今回のことを受け入れたあとは、私のすることに一切口を挟まないこと」

震える声で必死に訴える。

「もちろん、すべて終えたあと、永見の家には戻りません。以上のことを誓約してもらえないのであれば、私は選挙不正に関するすべての裏事情をあきらかにします」

それがどういう結果をもたらすか、正恭には当然わかること。

しばらくの沈黙ののち、わかったと電話の向こうで正恭が答える。

『詳細は追って連絡するが来生くんの件は明日早速手配しよう。伊関くんの身の安全は保証するし、お前が確実に仕事を全うしさえすれば、今後のことについても一切口を挟まないと約束しよう』

永見は証拠のため電話の会話をすべて録音して、正恭が電話を切ったのを確認してから受話器を下ろした。

「……まだ、安心するな」

永見は自戒する。

強い脱力感にも堪え、おぼつかない足取りでベッドまで移動した。肩の力を抜いて、大きなため息をついてから顔を手で覆って、そのままベッドに背を預ける。

部屋の明かりが眩しくて目を細めると、左手の指が視界に入ってきた。

指輪がないなど何気なく呟いた永見の言葉に正直に反応して、指の握り具合だけで伊関はサイズ違いを選んできた。指輪をプレゼントされたことよりも彼のその素直で純粋な気持ちが、嬉しくて仕方がなかった。

今回実家に戻るにあたって、マンションを処分すると同時に部屋にある荷物も捨てた。だが指輪だけは外せなかった。

この指輪があるから、寂しさに耐え、正恭に対峙し、決意を告げることができた。でもこの指輪も外さねばならない。理由はどうであれ、自分は伊関への裏切り行為を働

くことになるのだ。

両手を天井に伸ばし、ゆっくりと指輪を外す。それから蛍光灯の光にかざす。金と銀のコンビのその裏には言葉が刻まれている。

『DEARK.NAGAMI FROM TAKURO, WITH LOVE』

どれだけ遠く離れていても、この指輪があるかぎり、二人の気持ちはともにある。

ベッドの上に起き上がり、外した指輪を大切に机の中にしまい込む。中指のつけ根には、くっきりとそこにあった指輪の痕が残っている。

そこへ、永見は目を閉じてそっと唇を当てる。

「愛している」

伊関にすら、永見は二度しか告げていない。一度は軽井沢で、そして二度目は……。

「拓朗、愛している」

離れていても、いつも心はともにある。心の中で呟いたつもりの言葉は、空気を震わせて声となり、静かに空気の中に溶けた。

本文 p137～151 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>